

樺太とスキー (全国樺太連盟理事) 原田廣記

日本に初めて、スキー(ストー)についての記載があったのが1808年(文化5年)探検家の間宮林蔵が樺太探検で現地住民の樺太アイヌから冬期間の移動時に使用していたストー(スキー)を日本に持ち帰った。文面では履板(シトー)として紹介され、幅広の板を靴に取り付けて走ったり・滑ったりするものとされていた。当時日本では、深雪の中を「輪カンジキ」を使用して移動をしていた。

1910年(明治43年)スウェーデン駐在の杉村虎一公使がスウェーデン式のスキー用具を取り寄せて東京の砲兵工廠に依頼して製造する。

1911年(明治44年)オーストリアの軍人、テオドル・エドラ・フォン・レルヒ少佐が、日露戦争で勝利した日本の軍事視察のため来日した。レルヒは、当時マチアス・ツダルスキー(初めてのスキー教本を出した人)「リリエンフェルト・スキー滑降術」にスキー技術を学んでいたので日本では、雪の多い地方の視察を望んでいた。

明治44年1月5日、当時新潟県高田の陸軍第13師団の師団長長岡外史中將が、レルヒを招聘することになり、師団内にスキー技術研究会を設立して連隊長の堀内文次郎大佐をスキー研究委員長として、スキー教本をまとめ全国の師団から軍人12名を選抜し訓練を開始した。3月12日までの34日間にスキー携帯法・行進法・登行法・滑降法・制動法などの指導をレルヒから受けた。同年9月、レルヒは中佐に昇進して翌年(明治45年)2月6日北海道旭川の陸軍第7師団付となり赴任した。第7師団でもスキー技術研究会が作られ、各連隊から将校3名が2月20日から3月11日の3週間、レルヒ中佐の指導を受けた。その中に樺太国境守備隊からも将校が参加していた。

一方、樺太では明治44年2月「樺太日日新聞」によると『第1回樺太嶋技大運動会』として紀元節に陸軍練兵場で開催され、樺太庁の平岡定太郎長官が大会長として実施された。半里(約2 km)の道を露式寒敷(スキー)を付け往復して時間を計る。相当な人気でもあった。

明治45年2月6日の「樺太日日新聞」によると『軍隊と寒敷』と題して5回の連載が出ています。

〔本島寒敷の沿革〕 樺太のスキーは、長い歴史を持っている。本島露人(ロシア人)・アイヌは、邦領(日本)の前から既にスキーを実用に供して、野に山に雪上の行動を敏活にしている。スキーが本島に渡ったのは、露西亜(ロシア)本国から入ったもので、形は話しに聞く瑞典(スウェーデン)のものと異同型である。そして、この具を用いたものはアイヌが犬ゾリに乗ったとき丸寒敷として兼ねたものでした。露人が先ず、これを伝えたので邦人(日本人)は、丸寒敷に対して露式寒敷(スキー)と称す。

〔露式寒敷の研究〕 露式寒敷は、一般に興味をもって見られていたが、実用するのはあまり多くはなかった。しかし、樺太庁の中川一部長が、明治42年、並川村方面に出張した時に原野を露人がこの具を用いているのを見た。これは、適実の具と悟り、これを樺太島技として取り入れスキーが盛んに研究されることになった。『軍隊と寒敷』と題して、露式寒敷(スキー)の使用法及び教育法について樺太守備隊が研究した報告書が記載されている。

1 寒敷使用法 露式寒敷は、積雪期の移動がより良い。

- ①降雪または大吹雪のため、道路が塞がり交通ができないときも伝令状が伝えられる。
- ②前哨勤務・歩哨・斥候・巡察・伝令に服務する時。
- ③地形・敵情報・偵察する時。
- ④部隊の前進に先立ち道路を開設する時。

2 使用の利

- ①積雪の多い寒地では、積雪中の歩行器としては露式寒敷に及ぶものはない。

3 使用の害

- ①寒敷は、1個の平均950匁(約 3.6kg)から1貫30匁(3.8kg)でこれを履いて歩行する者は、使用の心得がないとしきりと転倒し暫時使用すると足の甲や関節に痛みや疲労が著しい。

また、樺太日日新聞2月9・10日付では

1 寒敷改良法

寒敷は椴松板を用い、その長さ4尺8寸(1.48m)から5尺7寸(1.7m)、幅5寸(15cm)から6寸(18cm)、厚さ2分(7.5mm)から3分(9mm)、重さ950匁(3.6kg)から1貫30匁(3.8kg)で裏の中央部に毛皮が張り付いていて、細縄で靴に取り付けているが行進中重たいため雪中に突っ込み転倒するばかりである。そこで、

- ①木質は、粘りと弾力のある柳板にして裏面は総て毛皮を張付ける。
- ②前後の曲がり、約30度にする。
- ③靴に当たるところに毛布を張り靴が滑らないようにする。

2 部隊の教育

寒敷の履く部隊の教育も普通の教練のように使い方の要領を知らせる。

- ①横隊において、右(左)向けは6秒から8秒。
- ②縦隊において、後向けは9秒から12秒。
- ③行進間における回転動作は、10秒から14秒。

3 射撃

露式寒敷を履いて射撃動作をするためには、多少の障害はまぬかれないが教範の規定の姿勢をとる。

4 行軍

- ①使用法を熟練して目的をもって降雪の多少に関わらず野外演習をする。
- ②中隊全軍は終日行軍を実施する。
- ③毎週1回は、行軍をする。 以上詳細に報道されています。

明治45年2月11日 『第2回 樺太嶋技大運動会』の案内(予告)

官幣大社樺太神社競馬場で開催、
樺太嶋技大運動会会長 平岡定太郎 樺太庁長官

- ①競技は午前10時開始 午後4時終了。
- ②競技用寒敷は、運動会に備付するものを使用する。

③競技者は各自弁当を持参のこと。

明治45年2月13日 「樺太日日新聞」記事の要約

スキー日和の中、第2回樺太嶋技大運動会が開催され、大会長 平岡定太郎樺太庁長官、副会長 中川一部長、審判長 生田目司令官、委員長 尾崎二部長。

〔競技種目〕 ①兵士競技 ②普通 ③通信工夫 ④消防夫 ⑤警察官 ⑥兵士 ⑦児童旗取 ⑧長距離 ⑨普通 ⑩各課 ⑪部落 ⑫仮装 ⑬障害物 ⑭提灯 ⑮代表選手

〔競技開始〕 兵士競技は樺太守備隊兵士20名による戦いで、轟副官の号砲一発で1周が一里（約4km）を8分17秒で、佐々木又一氏が新記録で優勝して、2着は安澤定信氏、3着は木村子之氏と続く。観客は2,500名有余で大声援を送っていた。また、児童競技は豊原校2千名から選抜された24名の樺太健児は原校長に引率されて号砲と共に距離5丁（約545m）を疾風の如く走り、優勝は中山博さん、2着は小口誠さん、3着は斉藤由太郎さんでした。

〔障害物競技〕 二箇所の塹壕を乗り越えての往復で一進一退、観客は総立ちで応援をしたが優勝は森鉦之助氏、2着は西村宗五郎氏、3着は関藤吉氏。

当日の各回賞品は、同会の特製メダルが優勝者に、賞金は優勝者3円、2着2円、3着1円。他に選手代表戦では優勝者高田正氏に優勝旗と白米一俵が送られ、万歳歓呼の内に第2回樺太嶋技大運動会は散会を告げた。

翌年1913年(大正2年)からは、本国(日本)から送られたスキー板とストックは竹製の一本杖を使用して軍事訓練・島民の体育向上に使用されるようになった。以後は、レルヒ中佐のスキー指導による『日本スキー教育本』が基本になってスキー技術の発展へとつながって行きました。2011年(平成23年)1月12日に、「日本スキー発祥100周年記念式典」が新潟県上越市で開催されます。

【備考】 この文章は、当藻岩レルヒ会の原田廣記会長が全国樺太連盟機関紙「樺連情報」に寄稿し、同紙に平成23年1月1日以降二回に分けて掲載される同じタイトルの記事の草稿です。